

フィールドワーク報告 ～3月23日～

夏梅 文和

「相模湖ダムの歴史を記録する会」の先行調査・研究から遅れること約半世紀、新たな視点を探していた矢先、ネットに中国人強制連行・西松建設裁判和解成立の記事が目飛び込んできた。裁判記録5冊中4冊を入手。第Ⅲは「継承する会」事務局長・川原さんのご厚意により一時借用した。安野発電所は「歴史の倉庫」であるという言葉に魅了され、現地の皆様のご協力を得て広島・安野発電所入りを果たすことができました。

この地に立つにあたって、元ひめゆり部隊生き残りの方の言葉「平凡な日常の生活が幸福なことなのだ」という言葉を思い起こしました。もう一人はサリドマイド訴訟で統一原告団長を務められた佐藤巖さんの言葉「何か野心があって裁判を起こしたのではない。子供たちに普通の日常生活を作ってもらいたいから」という言葉です。前者は青春の最中に戦場に放り出され、過酷で非情な体験から語られています。後者は薬害により誕生した手の短い子供の存在によって家庭崩壊を目の当たりにした体験がありました。幸福な日常を奪われた苦しみは生涯にわたるものである点が共通しています。

戦時下、ここ安野発電所建設のために強制連行・強制労働させられた中国人被害者の掛け替えのない日常生活を踏みにじられたことを事前学習で学びました。現在を生きる者として「歴史の倉庫」をこの目で確かめ、強制連行の顛末とは何かを考えたいと思い、安野発電所のフィールドワークを志しました。

「継承する会」の中さんの運転する車で案内を担当して下さる川原さん、夏梅と連れ合いの和世の4名で現地入り。中国電力職員の方2名が出迎えてくれた。山肌から安野発電所のシンボルともいえる鉄管が右に1本、左に2本見えた。ほぼ当時の道路のままの空き地が坪野収容所跡。フィールドワーク資料の写真から監視員と警察官の詰所には官民一体の管理体制が見えてくる。中国人被害者が一日に二度上り下りしたという山の上にある貯水槽を目ざして階段をのぼる。上り口には当時、朝鮮の人たちが耕していたという畑跡地がありました。中国人と朝鮮人の扱いの違いであろう痕跡です。下から見上げる鉄管は緩やかな傾斜に見えましたが、貯水槽から見下ろすと90度ようです。当時は鉄管ではなく立坑を掘って水を流していたと説明があり、まさに、自分たちが立っているコンクリートの蓋がそれでした。フィールドワークの醍醐味を味わいました。山の麓に「安野中国人受難之碑」が建立されています。碑文がすべてを語っています。29名の死亡者は29cmの台座に、360名の中国人被害者数は360cmの高さに表現されています。被害者と加害者の連名にされることで中国語と日本語で表現されていることや「受難」という言葉が歴史的出来事としてふさわしく思いました。彼らが背負わされた十字架を表現していると思うからです。

今回、大きな驚きは上埤横坑から土居取水口を目指す途中、西谷立坑を見て津浪収容所跡に立ち寄った時、偶然、私たちを見かけた地元の片山さんから声をかけられたことです。彼女の

家は当時のことを証言してくれた岡田ヒデコさんと津浪収容所跡の真向かいにある隣の家でした。ご実家は光石にあり、光石横坑のことばかりではなく、何と現在分からなくなっている東谷横坑跡（中国自動車道のあたり）を知っている方だったのです。早速、川原さんらは後日案内してもらおう約束をしていました。古き良き時代の人情が今も息づいているラッキーな出来事であったと思います。

この土地は強制労働の現場という負の歴史を抱えています。それとは正反対の物語も残されている証拠です。細やかではありますが、中国人労働者との心温まる交流があったということです。過酷な労働に加えて粗末な食事のために苦しんでいた彼らが塩を求めてたまたま寄田さん宅を尋ねた折、塩を差し入れしてもらった

話です。それを契機に、彼らを気の毒に思った寄田さんが時々蒸かしたイモを差し入れして食べてもらったという人情話です。このささやかな交流は帰国後の中国人にとっても忘れ難い出来事であったそうです。

川原さんが「日本人・朝鮮人・中国人とひとくくりに言うけれど」と語られた言葉から紋切り型の捉え方が人と人を切り離す要因になるのだと思いました。人と人をつなぐ因子のひとつは「やさしさ」とか「思いやり」という至って自然な感情なのだと思います。

今回のフィールドワークにご協力をいただいた皆様に感謝をしたいと思います。強制連行・強制労働の顛末とは中国人被害者が母国に帰国して終わりではないと思います。世代を通じて歴史的出来事を学び続けていくことだと思います。